
概要：組合活動未経験だった筆者が、執行部役員として活動に関わる中で経験した失敗、そして学びをまとめたものである。「分からない」と言う勇気や仲間との対話を通じて、組合活動の意義や支え合うことの大切さを実感した。組合を自分事として捉え、一歩踏み出すことの重要性を伝える。

組合活動は誰かのものだと思っていた

福井県本部／あわら市職員労働組合 笠川 正泰

1. はじめに

私は、これまで組合活動に積極的に関わってきた人間ではない。組合員として長く職場に在籍してはいたが、執行部の経験はなく、集会や学習会にも「声はかけられれば行くこともある」程度だった。組合が大切な存在であることは感覚的には理解していたが、「具体的に何をしているのか」「自分の仕事や生活にどう関係しているのか」と問われると、はっきりと答えられない立場だったと思う。

そんな私が 45 歳のとき、突然、副執行委員長を引き受けることになった。年齢的にはベテランと呼ばれる世代に入りつつあったが、組合活動についてはほぼ初心者と言ってよい状態だった。

本稿は、そうした立場から役員となり、迷いや戸惑い、失敗を重ねながら組合活動に関わってきた過程を振り返ったものである。完成された実践や成果を示すものではなく、同じように「よく分からないまま関わることになった」人にとって、何か考える材料になればと思い、記録としてまとめた。

2. 突然の指名と戸惑い

副執行委員長の話をもちかけられたとき、最初に浮かんだ感情は驚きと不安だった。なぜ自分なのか、務まるのか、何を求められているのか。そうした疑問が、ほとんど整理されないまま一度に頭の中を占めた。

断ろうと思えば断れたはずだ。しかし、「誰かがやらなければならない」「ここで自分が引いたら負担を他の誰かに押しつけることになるのではないか」という思いが勝り、深く考えないまま引き受けてしまった。今振り返ると、それは覚悟を決めたというより、「その場の流れに身を任せた」という表現の方が近い判断だったように思う。

3. 分からないことだらけの副執行委員長生活

副執行委員長になってからの日々は、正直に言って戸惑いの連続だった。執行委員会では、当たり前のように専門用語（オルグ：組織強化活動）や略語（秋闘が使われ、議題の背景や経緯を十分に理解できないまま話が進んでいくことも多かった。資料を事前に読んでも、どこが重要なのか分からず、会議後に「結局、今日の結論は何だったのだろう」と感じることもさえた。「こんな基本的なことを今さら聞いていいのだろうか」「役員になった以上、分からないとは言えないのではないか」。そうした思いから、疑問を抱えたまま会議を終えてしまうことも少なくなかった。

職場に戻ると、若い職員から「組合って具体的に何をしているんですか」「組合に入る意味は何ですか」と率直に聞かれる。そのたびに、自分自身がきちんと説明できないことに、後ろめたさと焦りを感じていた。組合を代表する立場に立ったにもかかわらず、自分自身が組合を十分に理解していなかったことに、改めて気づかされた瞬間だった。

4. 「分からない」と言う勇氣

状況が少しずつ変わり始めたのは、「分からないことを分からないと言おう」と腹をくくってからだった。これ以上、分からないふりを持続しても何も前に進まないと思い、思い切って会議中に質問してみた。

すると、先輩役員から返ってきたのは、「最初は誰でも同じだ」「分からないことを聞いてくれる方が助かる」という言葉だった。その言葉に、心から救われた気がした。自分だけが取り残されているのではないこと、完璧である必要はないことを、ようやく受け入れられた瞬間だった。

それ以降、少しずつではあるが、自分の言葉で質問し、自分なりに理解しながら会議に参加できるようになっていった。

5. 組合活動が「自分事」になる

組合活動に関わる時間が増えるにつれ、扱っているテーマの幅広さに驚かされるようになった。賃金や労働条件の交渉だけでなく、業務量の偏り、職場内の人間関係、若手職員の悩み、さらには地域との関わりまで、多岐にわたる課題が議論されていた。

その一つとして、組合活動を通じて地域行事に参加する機会もあった。例えば、あわら温泉で毎年8月に開催される「あわら湯かけ祭り」で、毎年組合で有志を募って参加している「民踊の夕べ」といった行事がある。金津音頭や芦原音頭を三味線の生演奏や唄に合わせて踊るのだが、落ち着いた雰囲気の中で地域文化に触れるよい機会であったと感じる。一方で、御輿に温泉のお湯をかけ合う活気ある湯かけ御輿という行事もあり、子どもから大人までが一体となり、地域全体が盛り上がる様子は非常に印象的だった。

あわら温泉湯かけまつり（令和7年8月8日、9日）



写真①：イベントチラシ



写真②：湯かけ御輿



写真③：民謡のタベ

こうした静と動、異なる雰囲気の記事に関わる中で、組合活動が職場の中だけで完結するものではなく、地域ともつながっていることを実感するようになった。このような経験を通じて、これまで組合は「誰かがやっているもの」「自分とは少し距離のあるもの」と感じていたものが、「自分自身の働き方や生活、さらには地域ともつながるもの」へと、少しずつ意識が変わっていった。この変化は、自分にとって大きな転機だったと感じている。

6. 執行委員長になるという決断

副執行委員長としての役割にも少しずつ慣れてきた頃、「次は執行委員長を」という話が持ち上がった。正直に言えば、そのときの気持ちは期待よりも不安の方が大きかった。まだ十分な知識も経験もない自分が、組合の代表として本当に務まるのだろうか——そうした思いが頭から離れなかった。

そのような中、毎年1月に地元ホテルで開催している旗開きがあった。私の役目は乾杯の音頭である。人前で話すことが得意ではない私にとって、それだけでも大きな緊張を伴う役割だった。当日は何度も頭の中で言葉を繰り返していたが、いざ壇上に立つと思うように言葉が出てこず、自分でも「うまくいかなかったな」と感じる出来だった。



写真④：新春旗開き



写真⑤：余興（この後、桶が市長の頭に・・・）

それでも、三役の仲間が自然に場の空気をつないでくれ、周囲の支えによって無事に旗開きを終わることができた。そのとき、自分一人では不十分でも、周りの力によって場が成り立っていくということを、改めて実感した。うまくできなかった悔しさは残ったが、それ以上に「一人で背負わなくていいんだ」という安心感の方が心に残った出来事でもあった。

これまでの自分であれば、「まだ早い」「他にふさわしい人がいるのではないか」と理由をつけて、引き受けることを避けていたかもしれない。しかし、副執行委員長として関わる中で、組合は一人で動かすものではなく、多くの人に支えられながら成り立っていることを少しずつ実感していたこともあり、簡単に断ることもできずにいた。

そうした中で、「完璧な人がなる役職ではない」「一人で全部背負う必要はない」という周囲の言葉に背中を押された。その言葉は、不安を消してくれるものではなかったが、「それでも引き受けてみよう」と思えるだけの安心感を与えてくれた。

最終的に決断できたのは、自分一人ではできるかどうかではなく、「周りと一緒にやっていけるかどうか」という視点に切り替わったからだと思う。迷いや不安はあったが、それも含めて引き受けてみようという覚悟を決め、執行委員長の役割を担うことにした。

7. 執行委員長としての現実

執行委員長になってからも、失敗や迷いは尽きない。判断に時間がかかることもあれば、段取りが思うように進まず反省することもある。意見がまとまらず、結論を出せないまま持ち越してしまう案件も少なくない。役職が変わったからといって、急に何でも分かるようになるわけではないのだと、日々実感している。そのような中で、執行委員長となって新たに経験したことの一つが、自治労福井県本部の「環境・平和・人権活動推進資金支援事業」への参画である。この事業は、県内で環境・平和・人権に関する活動を行う団体を支援し、自治労が掲げる社会連帯活動を地域に広げていくことを目的としている。私たちの単組では、2026年度事業として「あわら国際交流友の会」が実施する『あわら市国際交流事業 2026』と、「金津まちなか創成会」が実施する『カヤック体験会 2026』の2事業を推薦し、申請を行った。

あわら市国際交流事業は、日本語講座や防災講座、交流イベントを通じて外国人住民と地域住民の相互理解を深め、多文化共生による安全・安心な地域づくりを目指すものである。外国人住民が安心して暮らせる地域社会を築く取り組みは、人権尊重や地域共生の観点からも大きな意義があると感じた。一方、カヤック体験会は、竹田川という地域資源を活用しながら自然環境への関心を高め、人と人との交流を生み出す取り組みである。環境との共生や地域活性化につながる活動として、自治労 21 世紀宣言が掲げる理念とも重なるものだと考えた。



写真⑥：「あわら国際交流友の会」
(クリスマス異文化交流会)



写真⑦：「金津まちなか創成会」
(カヤック体験)

推薦にあたっては、「自治労の理念とどのようにつながるのか」など、多くのことを考えた。執行委員長になる前であれば、自分だけで結論を出そうとしていたかもしれない。しかし今回は執行部役員や組合員と意見交換を重ねながら検討を進めた。その過程で、組合活動は職場内の労働条件改善だけではなく、地域社会の課題解決や市民活動との連携にも役割があることを改めて学んだ。それでも、副執行委員長時代と大きく違ったのは、「一人で何とかしようとしなくなった」ことである。迷ったときほど執行部や組合員に相談し、それぞれの意見を聞きながら進めるように意識するようになった。

今回の支援事業への取り組みを通じて、組合は個人ではなく「チーム」で動くものであり、さらに地域のさまざまな団体とも連携しながら社会を支えていく存在なのだとことを実感した。まだ手探りの部分は多いが、迷いながらも対話を重ねていくことが、自分自身だけでなく組織全体の力につながっていくのだと考えている。これからも職場と地域をつなぐ視点を大切にしながら、一人ひとりの力を活かせる組織づくりに努め、執行委員長としての役割を果たしていきたい。

8. 自治研デビューとして書く意味

今回、自治研レポートとして文章を書くことにしたのは、「活動経験が少ない立場からでも挑戦できる」ということを、自分の実体験として残しておきたいと思ったからで

ある。正直に言えば、これまでの私にとって自治研は、専門的な研究や立派な実践を発表する人たちの場というイメージが強く、「忙しい仕事の合間にさらに動ける、意識の高い人たちの集まりなんだろうな」と、どこか距離を感じていた。だからこそ、自分には少しハードルが高いものだと思い込み、なかなか一步を踏み出せずにいたのが本音である。

しかし実際には、うまくいったことだけでなく、「やってみて迷ったこと」や「戸惑ったこと」を含めて共有することにも意味があるのではないかと感じている。私自身、人見知りで、人前でうまく話すのも得意ではなく、そもそも「何から始めればいいのか分からない」という状態だった。

そんなときに、自治労福井県本部の方に相談したところ、「参加者同士が共感したり、刺激を受け合ったりして、自然と応援し合う空気が生まれる。それが自治研だよ。みんな同じ仕事をしている仲間だから大丈夫」という言葉をかけてもらった。その一言で気持ちが少し楽になり、「それなら自分もやってみよう」と思うことができた。

45歳で突然役員となり、右も左も分からない状態で始まった私の経験ではあるが、同じように不安を感じている誰かにとって、「こんな人でも何とかやっているなら、自分も少しやってみようかな」と感じてもらえるような、ささやかな材料になればと思っている。

おわりに

まだ胸を張って語れるような成果があるわけではない。分からないことも多く、今も学びの途中であることに変わりはない。それでも、「やってみよう」と一步踏み出したこと、迷いながらも立ち止まらずに続けてきたことは、自分にとって確かな経験として残っている。

私の願いは、同世代や年下の職員が、これまでより少しでも組合活動に関わってくれることである。理由はとてもシンプルで、「やってみると意外と楽しい」と感じているからだ。活動の中で誰かに感謝された経験は、何にも代えがたい記憶として今も残っている。

また、組合活動は自分にとって新たな気づきや学びを得られる「成長の場」でもあった。以前の自分であれば踏み出せなかったことにも、少しずつ挑戦してみようと思えるようになってきている。こうした経験を、次の世代にもつないでいきたい。そのためにも、私自身もまだ途中であることを前提にしながら、新たな一步を踏み出し続けていきたいと思う。

本レポートが、自治研デビューとしての第一歩であると同時に、これから一步踏み出そうとしている誰かにとっての、小さなきっかけになればうれしい。